

掌編小説「子、親を選べず」



真之介君は、時々自分のお父さんが少しおかしいんじゃないかなと思うことがあります。

仕事は一生懸命するし、ご飯もちゃんと作ってくれるけれど、突然

「なんで鳥は空を飛べるようになったねえやろ、なあ？」

等と言ったりするからです。

真之介君にしてみれば

「空を飛ぶのを鳥、言うて、飛ばんのを動物というねえやないの？」

くらいにしか思っていないからです。

それにそんなどうでもいいような事を考えても仕方ないし、とも思っていたからです。

しかしお父さんは更に続けて

「鳥に羽がなくなつて地上を歩く動物になったねえやったら未だ分るねえやけど、ものの本によれば順番はその逆や、と書いてある。なんで動物の手足が羽になったねえや？何で空飛ぶ必要があつたねえやろか？それってどんな場合や？」

こうなるともう真之介君には返す言葉がなくなつてしまいます。

仕方がないので、この辺からは

「又、始まつた。勝手にさしところ」

と肩をすくめてしまいます。

でも、お父さんは未だ諦めません。

「そっかあ、ムササビや。木から木へ手足の間にあるマントを広げてグライダーみたいに滑空するムササビの、あのマントの部分他突然変異して、二枚マントになり、又変異して三枚、四枚、複数枚の果てに羽になった。そういう奴だけが残つて、ふうんでもって、パタパタそれを動かしたら、グライダーじゃなくて飛行機みたいに操縦できる事に気づいた、餌もその

方が採りやすかったねえやろ、きっと、それや、きっと」

見るとお父さんの顔には晴れ晴れとした満面の笑みが浮かんでいます。

「あちゃあ」

真之介君は思わず自分の額をぺたんと叩いてしまいました。

そうしてだんだん不安になってきてしまい

「ねえ、おとん、そんなことより自分、塾にいかんでええの？みんないつとうで？」

と思わず訊いてしまいました。

するとお父さんは

「塾？塾、行っても、なんで鳥が空を飛ぶようになったかとか、教えてくれへんねえやろ？

疑問抜きで、いきなり解き方から入るやあろ？

あと、解く時間の早い者勝ち競争やろ？

そんなん、学校卒業してから解けることやってあるやあん。いつか解けたらええねあで。

その方が、考え深こおうなって、ええやん。

せやから、わしみたいのは、いつも置いてけぼりやった。

そねえな処、金払ろうていって、どうないすんねえや？つまらんから、やめとき」

真之介君は何だかだんだん怖くなってきました。

「昨日教わった小六漢字で言えば、即効性且つ有効性まるでなし。

話にならんわ」

このまま行ったら、自分の「将来」はどうなってしまうのだろうか？

誠君のうちみtainなお金持ちには「絶対に」なれっこない。

そう思うと真之介君は、自分のお父さんを取り替えたくなってしまうました。

(完)